河蝦考

上

二 15
2366
1

門 二15
號 2366
卷 1

早稲田大學圖書館
昭25.6.16
寄贈

河蝦考序

花ふなくうぐひを水ふきむかたつのこゑをきけ
いたとゝいけるねいつれの歌をよ風さりくるとゝ
人とゝる人多れこうとよまさゝむといひて嘗蝦の
こゝろふ多くへ多ゝ世の人のきゝてめて樂ゝむを
いへるゝ後の歌人なゝの春の囚池のまけみそ
ゝふきゝく蛙のこゝゝ多ゝ山の井のゝさくゝゝて
大海のふくゝゝと思ゝゝさゝゝゝを久老神主の
万葉考槻落葉ふ都人を江戸人を出羽人を

ときゝふゆゝもてなやをなるゝらしいくれるふてやうてらの六の
巻軸作益人村とのの依為王ふよろみうけゝるゝことく
宴の香所ふまらゝとゝ弦引とゝめむのことつけことのゝ
ふもひゝゝもておゝもゝろく先てつへき事ゝること
てひたせておりのへゝく物んいれを物を大ゝを虫
なゝのさへつるゝこときるすふはひゝゝもてきく人の
ひゝ物おりゝゝろとめてたやをゝ物ふゝゝとふへゝるを
おゝめたゝあれふつけてを今人のよみいてん云の系と
言ゝゝつけゝゝの物ゝゝかゝむことゝ物ゝゝもゝれ

てけゝるゝくみやひやゝの形らんとゝろゝくへきこと
なりゝゝかゝて又中むゝゝより後の人ゝゝを弦をよく
よむ人とそれよみいつる云系のもと弦ふゝゝもよゝ
るゝの名なとふそあゝくゝ山のふゝくゝとんいれを淺
芽生のひさゝくゝのゝゝ見るゝゝを新治今のはり道ゝ
古ことふひの道ふよゝる人ゝを菅の根のねもころふ
ゝゝへのきゝひれひゝりもとめてきそふこゝくゝ物りぬる
ゝゝの概蕩葉ふちゝゝめてゝゝゝゝいゝれゝゝるふ
ひゝ弦さゝるを万えふ集のゝさゝく考へいふゝを物事

の中よりいとをけことなれとはつのふかちうり
のことゝいへや此書ひのあふねところなるを身のも
〳〵く思へりしふ今ちさ此一巻のつちうくなるよ
ゆる手火のとうゝふちるへふをけうはして形こん
ふこゆる山下道をハナ隈おちをおのあのうゆくなる
すと思ひつけゝれてかくいふを老のをさひのくり
くゝことゝ形〳〵むゝしさるを此ふをの作をめゝえん
ときゝをちゝぬ人なれとさいつころ松坂人小津
久足ゝをふ江戸よりいひおこせてたまはりふ

みをといひけゝをへられるをされと久思ふこゝへ
ふその答いつくあいおゝろへ多るこのうへふ近きころ
ゆをなりてを重荷ふうをふうちて驛路遠くこと
うをを人さへおわくなりてかゝる祢きことをへてけ
ひうれをなといなゝうへさひつるを立うへり又いてく
今をはや此ふを板ちうう人ふおゝて々ゝうけをうと
多ふとるをちうり思へりし然かくつれなくいひおこ
せ給ふをいとわんいふひなきをなとうらゝ形こせを
る ふ中ふゝちていゝおんとこの頃久思うをとうり

いひおこせてるゝ大ゝまち見ひのことといたれるゝ
おさんを行くいひやり給ひね此ころ〳〵といそ社去
いつることをけくてやいそ見と見つゝ〳〵ゝ此河蝦の考
見せゝおこされてるゝ下ゝきふゝのおのゝれのりとゝふゝち
おうれてるをつゝゝゝとひてる友ゝちの例のとりえて
さとうくいたれてる考へうなる此はゝ〳〵ふゝたゝ身〳〵一
てうりいさ角ゝとかきておうり給ふへくことと此人さ
いゝふゝえゝとゝつよゝをてかくかきいてゝふゝ形ん
うくて又年ゝまうせてうきそさひてるゝ中ゝた歌を

みやひうゝふんゝあゝくらんさ角ゝとゝいへるとゝふることゝ学
ひのゝゝゝねもこゝろなるよゝ〳〵なとた此はゝ〳〵ふゝ
ゝいたゝとゝ巧りめへきことなれた老のゝけくゝさ
ちるくゝ見ゝきゝ人たゝ見ゝちんゝゝと見ゝの和ゝう此一
巻とゝとゝ河蝦の一事ゝ角ゝかくねもこゝろなるよ
と見れた此はゝ〳〵ふゝのゝうるさ紀とよゝ〳〵やと又見ひ
なりぬまことや此ふゝのつゝりめゝ〳〵おゝくの書と
と考へ見ゝゝて可治能枝ゝれつゝゝゝふゝけ
つゝひ源きくゝさゝゝを多つゝゝさゝゝくゝゝ玉川の

瀧の清き瀧こそふんとゝめていや川のゆくへのそ
ゝさんへきゝうくはやけくきゝ志りて志るゝをへられ
しるゝいそゝくあゆゝれんとゝもらぬ人なれと
谷の岩百ふ多つるこゝろくはおとゝろときく
こゝちゝてかくいつふ多むはる

文政九年九月朔日　紀の國人本居大平

古ゆ伝ふ弱ぬ誤をこゝ以て志ら志ら志ら
志つる人あまた出来ぬ上つ代よりも
来ぬりてゝ志ら志ら志ら志ら志ら志ら
法ゝ志つる御学ひ志ら志ら志ら志ら
ふ多ゝ志ら志ら志ら志ら志ら志ら志ら
も又ゝ志ら志ら志ら志ら志ら志ら志ら
学ひや海ゝ志ら志ら志ら志ら志ら志ら

川津こといへるハ見て思ひ誤れるこ川津
のことをきゝて雛魚の明ことゝいへるハ皆て
思ひあやまれるこさるを古歌集の
詞ゝ年ゝ後あるこの玉〳〵後めぐ
まて記るふきかちをえらぶ手をあ
きて又ふたゝて何ゝ有てをあ
まゝまゝよ考へて古きふゝのあ

かゝとなるべきの〳〵川辺つ俗を
彼まを後を宮見て河蝦考一巻あれ
ばそれゝうかゝてハしづのき姫も
のことなく新井白の自とあきてゝ
それあるゝ玉川の流れと清く歩〳〵
ゆくさちぞあるあるいそ〳〵のまめ心
や近きこと後のあのうどゝちまぐ

志き程よりおのれまけじと思ひて
人おどろうる伝えられと考得らうと
覚ゆるものもあるき筆のうちあづ
うゝめえうるき書どもあるさりも
てあるべちふ合きんとゆーつうづ
うゝ学びの博さ志めさんとそうる
ふそゝなるを世うれさはらう

ゝ絵をゝくもちゝぐらなる書どひ
と記とゝあうるあゝぬきやかく
いみを演田孔侍従の殿の御館
ま代く法の東絵
藤原 彦麻呂

河蝦考目録

○河蝦と河鹿との差別
○川津と蝦蟇との差別
○春の蛙と秋の河蝦との差別
○河鹿小魚と虫と二種ある事
○蝦蟇の種類
○蟾蜍　○青蝦蟇　○赤蝦蟇
○黒蝦蟇　○蛙　○肱蝦蟇
○河蝦　○カジカカヘル　○山カハヅ
○コマカハヅ　○クソカヘル　○カハジカ

○鯢魚の種類

○鯢　○黄顙魚　○及々

○鱸魚　○鯛魚　○汝魚

○及々蜂　○スナホリ

○ダボハゼ　○ゴリ　○ゴロウ

○水中の物ハ悲て鳴ざるあとの考

○水ふ住ても陸ふ出る物ハ拜を発する事

○都ての鳴器水中ふてハ鳴さる事

○萬物の音聲ハ風氣ふ依て響るの考

○凡例

○皇國の古書ハ蛙も蝦も共によゝべるゆゑよゝこれと万葉集ハ河蝦とゝきるを例として此書中蝦をゝゝ河ハ蛙をゝゝべるにあてられゝ

○河鹿とゝきるハ蝦蟇の類鄰とゝきるハ魚の類ハて同名異種ゝ

○春の蛙といへるハ春の小田ハ鳴ものをゝひ秋のゝゝ河といへるハ山川ハ

ゝゝ

○諸國の方言を志るされたるハ大人去ぬる申年より歌枕のことおもひたゝ

まてまゝゝ成年まで三ゝゝゝ間冥の東の国ゝを住めぐれる所ゝの山川里ゝハて見聞れる所ゝ西の國ゝまもゝ所数おほゝるもべゝれとそハ人つてに聞つゝゝへられるものゝあれ共ゆゑ志るもおほゝるへゝ

○秋のゝゝ河の歌ハ万葉集より後九千有余年ゝゝえてよまれたるハ

をゝゝゝ此書のあれるゆつきていまゝへこのめるおもゝ心の君ゝもふ

水たれた和歌の故ハ俳諧あるも戯咲歌の故ハ俳諧ゝもきもあ

まぬべゝれとそハ撰者の心ゝゝてえゝゝとゝれるハあゝ侍おゝ所

へる君ゝもの心ゝあれたもハ故ゝゝれず猶いえまわゝきふ

ゝあるゝども所ゝゝふあゝ所ゝこゝゝれるもありぬべゝゝゆゑとゝ歌

のえゝゝゝのゝゝゝゝねたあり

冨安幸磨

河蝦考

源真楫著

万葉集ハ河蝦鳴まゝ河津妻呼あゝとよめる

河蝦ハ後の世ハ蛙鳴ゝゝよゝゝるものゝゝハお

なゝゝからゝゝ河蝦のゝとハちのき世ハ万葉乃哥

みよりて何ゝゝゝと考志るされまゝ所書ども乃

ゝゝと牧河蝦と河鹿とゝの乃ぢゝゝさゝろ乃ゝゝざ

ゝゝゝゝハ後世加自加とゝゝゝの魚と虫と二

種ゝゝゝゝゝゝゝもゝ古名ハ乃ゝゝず後の世乃俗

稱ゝゝ又二種あるゝゝゝゝゝぬ人一種ハ

ちりく論ぜるありて下にふしもあげつらふ
を見るべし今世のハかハづとなんで春の田
沼(ヌマ)ゐぐゐよりそめしゐ後しきまで唱とのゝ空
のゝあぼんゝく秋のゝ後鳴(ナク)ものゝとハ思ハさ法
人あほゝ芋ハ万葉乃歌より後ゐ有金ゐ
河蝦(カハヅ)を秋の歌よりもむてとゝんく家のりしゝ
さるゐとゝあハゐまゐど唱ゐゝへよ河津とよゝゝハ
山川の清きあゝれよもゝく夏の末ゝり秋
うきてけゝうふ詳めでゝく唱ゝものをいひて
裏の田溝(クミミゾ)をべて堤水(クマリミツ)ふ唱るものをべ蛙(カハヒ)とい

ひくかゝづとハ唱そざりゐむ万葉の歌ゐく見
まで河蝦(カハヅ)を山川よもゝて秋うきてあくゝものゝ
を唱ひゝ集の序よ花ゐ唱ゝひす
水ゐ住ゝづの声をきゝたゝゝ唱ゝ
秋とをむゝくかける文あれハ河蝦(カハヅ)ハ秋乃を
のゝ家てゝ考ゝそハ同集乃真字(マナ)序よあれ
ゝゝ集ゝ唱ゝよ春鶯之囀(ツリ)花中(ニ)秋蟬之吟樹
上(ニ)ハ春ゐく秋とゝ唱ゝむゝ唱ゝゐく唱ゝ

元来一部の書乃序ゐれハ玄秋をむゝいきでハてゝゝりれゝ
ものとのゝゝゝゝ乃ゝあゝゝすゐゐゐゐゐ年月
乃ゝゝを考ゝて春秋といゝる書あり又人のゝひを考ひも玄秋行
十と考ゝんよあゝすや吾友青梅のゐ林猿聚云古今の序中これのゝ

あしひき素秋をむかへし春の花のあしき秋の月の夜てらさふ
又素のあしき花のちるをとゝ秋の夕くれはよあの素乃落るをきゝと
いふるたらひ皆素秋をむかへうけるあてこゝをも素秋りてかける事勿
論しかいつりおのれ物思ふよる山集万葉の末年天平宝字より延
年まて凡百ゐ十年を経て高のさゐもうりうまべて一変しうる付
あれハ紀氏のこゝろもたしうるハ勿りうさかれどそれらうえあり
後ある長明が云名称よ井をのうかゝのてことゆよのゝ位てとうけ
るとありまて水くよまむうかゝといふるを素の田の地ゐハあうさうと
をしらるけとの実よろうよすゝて
うかゝよあかうさるをのちゝ
河蝦を名所の冠辞のてくおくる奇あり其
ゐとりのふるをゝ万葉八十七丁 河津鳴耳南備
河雨陰所見今哉開良武山振乃花山歌まゝ
新古今よもいわり古今春下よかゝ唱井を
の山吹ちりまろ花のさゝうよあかまゝものを

物歌ゝ古今六帖よりも出ゝり六帖のかゝの事のてハ乃りし おハ
ゐを神南備門も井をも河蝦のまゝて鳴処
ふきて其処乃枕言葉のてくおくるものあり
まてよ上田秋成が冠辞續貂ハゝ唱成
も冠辞をして出されゝりいうゐも皆山吹乃
ゐよてゝうゝ乃ゐ紀ハあき歌なり万葉よ真
鳥住卯名手乃杜安之我和流難波能美津ゐ
をつゝ弟たるよおゝゝ大和物語上よ花さうもきゝも
ゝゝゝ色ゝゝも伊勢物語の やまるとゝゝ唱井をのみふき
ゝゝゝの哥ハ乃よりのをし
「都人きてもをられむゝゝゝあくあるの井戸

の山吹の花とあるも同じつゞきにて万葉乃旁
よりくはしくきこゆるとおぼゆ同集よ志のびゝ
ゆゝしらぬのをゝむをも志ゝにゝゝゝゝ山吹の
花とよゝゝるハまこくまの堤のこゝゝゝゝきき
ど山二首ともよ河津の旁ハあゝゝ路の河ゝ
くゝ詞ふあゝゝの井戸ゝゝふ家ゝゝ後京の治
ゝゝよつゝゝゝる橋公平女とあり次ハ人の
こゝゝたのゝゝゝくあゝゝゝれて山吹のちりさた
ふを見ゝよゝて つゝゝゝれとありて堤ハ河
のあほひよゝゝるのゝゝて滅よ河堀をよ知る

歌ふハあゝゝゝゝゝゝゝよ河津とゝひゝゝハ裏の
田よ鳴ものにあゝざるとゝもでよゝゝるゝゝゝ河
堀とゝゝふハ則河堀のことゝくそれゞ住て鳴処
をやゞて名よあほきて河津とよびゝるゝて万
葉集ふハ河堀も川津も河津ともゝきて
蛙の字をゝゝゝとゝゝよまゞ和名抄伊豆國加茂
郡ふ川津々あり川津よゝれる名も後も
河津庄とゝひまゝ河津氏の人もゝゝゝゝ新
撰字鏡和名抄ふハ加倍流といひて加波豆
といゝゝゝ和訓栞ふハゝゝゝをあゞてゝるをいゝ

ず皆知とうようりて志る世ふるものふてらし
うべうべきハ今の京都とありて後も久しく
蛙の字をとらげしハよまざりし河蝦と書たる
ハ万葉九十八丁河蝦鳴六田乃河之川楊乃根毛居
侶雖見不飽君鴨河津河津ハ借字なり牡丹にうし
ゝ長明が名抄よ井手のうらげ志ゝこゝ
ゝ世やゝあるとゝゆてたべれ世の人思ひ侍るハたゞ
うるハうれうらげといふとゝを思ひ侍るめれそれ
も遠侍ゝらさゝどうらづゝゝうるハかゝまゝ
よ侍ゝす只この井手乃川よのゝ侍るなり久

志きやゝうゝて知ほきさゝもあゝずゝのつゝのか
ゝるのやうよあゝうよゝとゝをあゝくてゝれゝもん
ゝも侍ゝず常よハ水よのゝきゝて夜ふゝる不
やゝうれゝ明ゝるハ明ゝうゝくゝ侍きゝてあれ
ある辨ゝて侍る云云こゝゝ水よのゝきゝてゝい
へるゆて古今の水よ住うゝ川とうゝるも田のうゝる
のゝゝふあゝざるゝゝ志ゝれうゝるハ陸のうゝさ
むうゝにゝりうゝるのの侍り見河蝦と田蛙の
ゝうゝちをよゝく志るゝれゝ井ゝよのゝ
ありゝいゝれゝるハ他ゝ志ゝるゝのゝりづこ

るも山川谷川の清き石間よりもをりさゝゐを
世の人も芝居の流よりまぐられるるや井出乃
玉川ふのゝ玉川ハもをりと思ふ人おほし井
ゑ玉川ハ井出乃大原諸兄公の家あり山吹
をあきゝ極させて漢土よりうゐを取よをて
たれ〳〵めるるようゐうゐハこゝのゝよあゐ
いゐハよゝもなをゝぐりてとるもたゝぬ
ゝとれりやまを魂の定まらぬ徒ハうる虫の類
までもあろこゝよりきるぶよ殺〳〵と思ふハいう
まぞや山川の水清きとゝろハ住ものゝ拝も

おのづゝきゝゝく田沼の澱水よ住ものハ拝もお
のづゝだゝうゐゐこゝるも水清きとゝ殺ハ音
も清〳〵和名抄よ種類あほくあぐるるも皆
加倍流ものゝいひくゝゐぐといゝぐるを思へで蛙ハ
悪名まて河津ハ河よいる明りの我のゝいよ名仍り
ゝり万葉ふ雞冠樹を加倍流氐といふ〳〵ハ蛙
多の義まてゝれゞ多よ巣の形の似されハ名つ事
〳〵あり後よ留をたぐきて加倍氐のゝみちとん
へり万葉十四兒毛知夜麻和可加敝流氐能毛美
都麻氐宿毛等和波毛布汝波安杼可毛布この歌
へるで

ハ若根あり沖よ近く八の巻
乃哥よ合セて考ふべし　又八吾屋戸爾黄變蝦手毎
見妹乎懸管不憂日者無　こゝハ根を蝦をとるきりこの
アラをも考へし　蝦蟇ハ日本紀應神天皇十九年条よ幸吉
野宮時國樔人來朝云云毎取山菓食亦煮蝦
蟇為上味名曰毛涤云云字鏡ハ加比留本草和
名ハ鼃加倍留和名抄ハ加閉流催馬樂の呂の歌
よ無力蝦の曲有てちゝろあきかへるちゝろれき
へる骨なる紀ゝ比ゝろ
撰恋四よをとこのものれどゝひつゝゝる女のね
あるめあるまゝうてたゝきゝろれどきゝつゝもずや有

きむ門もあゝびたゝうゝふあきハ田のわゝをよゝへる
のゝゝろふをきゝく「あゝ」川の山田のそほのおゝを
て紅ゝをゝへるの音をゝゝゝゝゝ山田のゝ
のをゝへるを以る他あり又桃草紙よゝへるの
もゝゝりよあちてやをたるを「ゝゝつゝのおきよこ
がゝゝものゝれて蟇の弱ゝてゝへるれゝりゝゝゝん
ひ中勢集よゝれゝへるゝゝつゝく「まれゝゝゝく
ゝゝをおゝてハゝのゝきゝむよゝへるてゝ居をあた
のゝゝとあるれゝゝハ皆蛙を帰の秀句をゝりまゝ
清神羽白集よ「ちゝひしゝをおゝひへるの人ゝれゝ

くちうちおとふこころ和とこえ蜻蛉日記ふ「おほ
ハこ又神のなまをあやあるうりむ裳りしこと思ひ
くるハあどよ紀るハ共くよ智るよそへうりかる
類形あるべしさて字鏡よ加比留とかき和名抄
よ加閑流とうきるハ假字たぐへるふ似これと比〻倍
ハ同韻よてふるく通いしうきうきるまゑ〻すくれ
ううべ和名抄越前國敦賀郡鹿蒜云処を註
よ加倍流とうきと延喜式神名帳ふ同郡加比留神
社又鹿蒜田口神社あり其この山を古歌よくくる
山とよゑて帰こうろもること今形志うり山事

くやく契沖阿闍梨の和字正濫抄ふ音面を
たうひるをいふくきをうくるといふ形うといたれ
さう又鳥の數鳴こを万葉よ佐比豆流とうき字
鏡よ左反豆留とある類形あり契沖云蛙こと
に春よいうりてむぐ紀き出るハ魂のくるやうな
きば還るゆよ名つきをうるうこれうう又本草綱
目曰蛾墓懐土取置遠所一夕復還其所一ここえさ
ヒ実よさうることくやとくよ同ふ實よ志うり形りうくく
りうくるの名見るりとつうるるや 拾よこうよふ蛾墓ハ蟾蜍
実よあや〻紀術ありてよくくりのをひきてうらふとのたりタつうくる をりのたるべし初きくるハ
れば出て空をあうくく形るときハ一大たうり字よをる蝶蛛蛛蚊の影ハ

ハタと音せられたるは口の中より入ハまことよ氣をはぶきてこえたるは
初きの名こゝに出たり又其地里をもよくてきゃくたりて遠き所よ
ちつるまも三夜の月よりとの処よりくるとらくりかるの名もこれなり
おこりたるべし古事記祝詞万葉にも多爾具久とありて則これが
よくもの名なるこゝもちるべしうり蛭蟇の字をもちゆるり又常の
かるゝも蛭蟇の字を當るハこれその形のものまて初きハ蛭蟇乃
さゝひの首長
あれだ有べし　後よあの蛙をもこゝろ河とのこゝろ
上よ記く処の万葉古今の歌よ名所の冠辞のごく
ゝ河唱云云亦たるゞ回〳〵く山吹よよゝあつをゝる
よりそれを和歌ゝてまゝ後撰まも二首ともふ
山吹よよゝあつをたる成ゝて山吹の花咲こゝ
あゝゝ唱ものなゝゝ河とよゝなれゝむされどいまゞ
後撰の時よゝゝ河と春の題まてよゝまゞりゝ

まゝ河よ信と小田よ信とのゝゞ兄のゝまて回〳〵
類のものあれだ河蛭も山吹の花咲こゝ弱あゝぬ
よハあゝず其のまゝ秋のきてハとよ辞のよゝ
〳〵あゝれよめでゝくあるゞ故よ古人も秋ゝきて
唱時をめでゝられゝものゝ者　春よゝ河蛭も出ていさゝゝづゝ
春とゝひゝく云ハゝゝ河の名ゝゞ唱ぬるもあゝず百ちゝゝさへつる
ひ声をわよあゞて兄の時なゝれゞ虫も兄よあゞゝくて春べし
されと鳥の形ハ昼のものまて夜ものまてつゞをあゝて
のまて秋さゝゝ有るゞゝ多ゝ　おのれ西川より河をゝゝ虫の形ハ大ゝ兄のゝて
乃云まゝ西川よりうて幾ゝ虫よ有ゝゝ有ゝ　又の年
夕川ゝゝうて云ゝも主あゞ　ちゝ兄人ゝゝもとひまゝ
物信継を云べまてあゝりこゝろゝゝゝゝ河ハ二月のまゝゝ出た
り曽丹集よ二月の所よ氣宿の板井の水やぬるゝゝん底のかハ
河の声をゝゝくあゝりとゝ兄るハ夏の蛙の
ゝをゝり山川の音きき耶のハゝゝ耶のハゝゝおそゝゝ　万葉のこゝろハ春秋

あぢ〻題をさぐりてよまば霧霧(キリ)あとも雲も
秋もよき今ハ雲のそのと定てる鳥あども春も
夏もよきとるハ実ま眼ま見耳ま聞てるをアこによき
出れだなり世ハたるふ後あきども鎌倉右大臣
實朝(サネトモ)公ハ雄を夏の歌よきぬへり金槐集家集也
小夏の歌四月まり小田のまぶら男山とまれ
せきこいるるあま雄鳴れり こハ雲の雄を夏よませぬへり 山公の山ま
へぶりをこのませ弱へるてハ前後ま たなびな
くあり〜まり〜れだかくたこと弱のまにくよき出
させぬへるあぢ山とめでこ〜〜〜六帖六ま貫之

あるき来るうぐひす鳴なりあ〜鬼のみふきの花
白へへこあり見ハ実のうぐひすあれどいまぐ小田
のそのをよめるまハあるまじ拾遺集春題ま〜次
よこ人ま〜び沢水ま〜うぐひす山吹のうつろふ
かるや唐ま〜ぬ山歌も六帖ま出こり後拾遺
集春下大蔵高遠(タカトホ) 沼水ま雄鳴なりむへ〜こそ
き〜の山吹さうりたりまれ又長久二年弘徽殿
女御の歌乃歌合ふかりぐをよめる良暹法師三
うぐれてもうく雄乃諸声ま さるときそこそる年ま
のうき草見おそ食く今いふ処の雲乃雄なり

是よりつきくふ裏の蛙のこゑむてくありて題まも春のものとハ定たりけむ夏の題とさゞまりて後ハたとくだ笑秋よいろりてうるいろきこゑをゆつるも夏ハらでハ蛙こゑのよこかきやくにありしるべしそまより後ハ題の部類よりよくあげてうらげもうくるもあしなべく夏のものやくに歌まハ皆うらげとよこきこゑて実の河蝦ハ名を田蛙よとこれて秋ものをゞよまにありうり其後よ音をさへ鯉よとられるハいと和歌ことふおゆひあげこゑん

か〜後拾遺の頃よりつゞくくよよ多る歌おほくハ山吹よよこ合せるを思くだ方ゝハ万葉の神南備河の一首よりうほきるとゑ勝間よいそゆるをゞれがゆゝのおゆひ草の類ハ新古今雑の部よ友ゝ恵良こゑるあへいこれもさひるあつれたりふ田の蛙の夕くれの声山吹ハ花の恵ハたりかさ〜ねど河蝦と田蛙とこきまてよるれるこゞくきこゑるあるかゝげこいひまれる時ハあれど河蝦ハ山集のこゑハ山ら恵のものくみうれもさひゞよといつるもの実ゝてゆとハ和のものハこゑりといこゞるよ〜といつるよ似〜うそのうく恵の影よいら雑の部よ入るもまこよしあり歌なり

万葉十秋雑の歌の中よ詠蝦歌五首皆山川よのこよこて田沼なゆゝよ笑るハ恵ゝ川もなし〜あのゆらもこれ恵ゝり

三吉野乃石床不避鳴川津諾文鳴来河乎淨

神名火之山下動去水丹川津鳴成秋登将云鳥屋草枕客爾物念吾聞者夕片設而鳴川津可聞瀬呼速見落當知足白浪爾川津鳴奈利朝夕毎上瀬爾河津妻呼暮去者衣手寒三妻将枕跡香

六帖よりの歌十一首あるゞ中より五首ハ万葉の歌あり又後撰と拾遺よりとれる歌二首あり古今と後の世のうと入まじりたるゞ中より「玉川の人ともよきひなくらのゆ山ゆ夕くきをハをしゝやハあゝぬあゞハるるきすゞをあれた万葉よつぎてハ六帖をふまへとすゝしされど紀氏の歌もまよまれしれたちやく山ひよりう秋のゝ川ハのまハやなまくり名ん古今序の詞ハ文よつきてゆくりこゝかるきよりてやかれ歌ん

右のごゝく万葉集よりてハ正しく夏の末より秋うきて河よ鳴るものをのゝ河津とよゝうり古今の序ふいへるもこのゝ鳴のゝでハ蛙の声よ對し

かゝゝさまと夫の須たやく田よ鳴るものをもゝハ

げとゆひゝまやと思ほゝきとあり伊勢物語ふ

業平朝臣の歌として上よも下ゆも蛙をよめる秋

ありてゝまふ田よよゝうり乞ハ作り物語よてハ河

きどいゆゝうりゝ出来ゝ考べゝ上よ「ゝれゝよ

歌やゝゝんゝゝゝさゝ水の下よてゝうゝ声よ鳴く

下よ「よひゝゝよ蛙のあゝさなく田よハ水こゝまさ

き雨ハゝゝねゝゝ乞ゝゝ猶万葉秋の相聞の歌

よも寄「蛙」てあゝゝゝでにいゝるゝゝく河蛙も夾

鳴ぬよあゝねゝゝ来ハ声清亮ゝゝゝ鳴る蛙

のさゝ鳴のごとくあるよ田蛙の諸声よ小田もるゞ
くだゝりあれハそれよりあぎれく紅とつらに おこ
ゑゝまて形よハいりまもろ川ゝよゝ俗よハうる
とゝふゝふゝふあまりこの介万葉三の長奇ゝ哥
香川よゝゝく且雲二多頭羽亂夕霧丹河津者
騒云又六ゝ川之瀬毎閑來者朝霧立夕去
者河津鳴奈利利今本作辨云宇万伎本ニヨル云又三和河佐保川
あゞゝゝもよゝゝうされゞ無名抄よ歌多の
ゝゝ川乃位よゝいゝるハいゝゝをまもれゝる
世のゝとゝてさゝゞゝかゝゞゝゝくるのゝちゝをいて

きゝゝるハこゝゝを用られるものゝ河蝦も田蛙
も其種類あきハ形も大ゝ同じ蝦蟇ふゝく
あり和名抄ハ蛙ハ蝦蟇也青蝦蟇注云蝦蟇大
而青脊謂之土鴨このゝもの田沼池溝もべく堪水
ある処の草むゝゝゝゝふすゝて人ゝ者ゞ皆水中
よ入ものゝゝり今の俗よハちまゝうるあゞゝもいゝう土鴨といゝるゞく声ゝ
ゝゝゝく春ゝゝゝ鳴ゝものゝゝり近世の俗よ青蛙と
いゝゝものハ色よ異あり同書よ蛙黽形小ヲ如蝦蟇
而青色者也と有ものゝふて此ものハ草木の枝葉
よ宿りて雨ふゝんとする時ハ必鳴りのゝ故よ雨

蛙の義あり青色あるをもて俗ニ青蛙ともいへ
ど和名抄の青蝦蟇ニ混すべからざるものハ脊
の書き中ニ黒斑あり本草綱目ニ保昇曰黿ハ
蝦蟇之属居陸地青脊善鳴聲作蛙者是也と
有りのみて水ニ住めるものハ異あるをあらべ〳〵漢
書ニ師古曰蛙者樂之淫聲非正曲也といへる
ごとく群ぶ〳〵てうるさくかまびすしく應卯ぐ
蛙ハ邪音也といへるも同〳〵本草ニ身小能跳
接百歩解作呷々聲云いへるハ蝦蟇あて小
田のものハ形大きくふとく山川のものハちひ

さく瘦て色黑く鼠頭尖るものなりさるに
井戸の辺川の河蝦ありて人の洞あるを見
たり〳〵ハもと色黑うしき康頼本草小黿阿於加倍流蝦久呂加倍流と云ハ誤り
和名抄黑蝦蟇注云蝦蟇黑色謂之蛤子この
ものよく河蝦ニ似たり形ちひさく群れ〳〵き
りの多り濕地の小流有るハ土を穿て住
もの乃ち多くその色黑く土ニ似たり故ニ山名ニ
聲ニ似たりきとりて人ものを食ひて尋きて見る大
うる見えざるものハ或人曰山ものきハめてちひ
さく色黑く脂のさきるもありと云ハいか

やいまぐこえび河蝦ハ脂頭ぢよ肱目のとき尤
點あり形も似たれ共ハ脂頭もまた同しうるべし
此種類をべて脂腹よこのものあり岩石をま
き横よまれをぐりてあちず（こうよ木末といふハ雨蛙のことなり）山川
よ鳴河蝦の形これよ似く肉薄し今本草家
り蛤ゐを赤蛙よあつる説あるも色の赤きの
こたぐひなく形ハ細くしてなれさも有へし大同
類聚方よ皆加倍流といひく赤蛙のこを阿加
加波津と有も河蛭よりこちの似られたいふ似る
べしされど河蝦ハ肉瘦て細くあるて赤蛙ハ肉

厚し爾雅云在水曰鼃（音蛙）漢東方朔傳云水多鼃
與師古曰鼃即蛙字也似蝦蟇小長脚人取食之
（色おとりて黒くて鼃ハからげあり水よ住て脚長きものなり）又國語の晉語曰晉師圍而
灌之云云沉竈産鼃云云注ふ沉竈懸釜而炊也産
鼃鼃生於竈也鼃蝦蟇也とも云ふ晉書曰惠帝
嘗在華林園聞蝦蟇聲謂左右曰此鳴者為官
乎為私乎云云（あれらハ園中の池よ居るなり）今按よ漢書よ鼃似蝦
蟇小とのひ國語ふ鼃蝦蟇也と注せり又晉人の
詩ふ竈中生蛙蝦ともいひくあれ物のこ
とも云ふれど漢武帝紀ふ鼃蝦蟇闘とのこもこえ

たまゝ同類異種あるべし〜續日本紀二十九云大宰府言肥後國八代郡正倉院北畔に蝦蟇陳列廣可七丈云云又三十八云摂津職言云云蝦蟇二万許云云從難波市南道南行池列可三町云云後の世なも蝦蟇合戦といひて諸國よりあつまる今武青梅同八王子よ毎年三月のころ蝦蟇合戦あり〜見るに人つゞくり両所ともに蟾蜍ありさまゝ續紀の蝦蟇も記きゞるあるべし〜本朝文粋村上天皇御製の御詩に蝦蟇左耐驚云云も野鋭よむ〜〜記きあれたなり其土地よりて

大同小異あれば如〜この書どもよりすら文字のうをりてはたゞへるこゝとありたゞむへゝゞ本草綱目よ吳瑞曰長脚石雞也一名錦襖子六七月山谷間有之性味同水雞又曰一種小形善鳴者名蠶子とあるもこゝの河蝦よ似り秋鳴りのく拜清亮なるハおのづゝ時よ感ぜるなや蠶のものゝ吳所るへきよ〜ハたやくよりりく論あるゝど河蝦と河鹿とのくちめ程〜〜なりゞゞあるハ河鹿といふものゝ声〜〜〜れもの廉よむゝて河廉といふもいひ奥津怪まそハるふゝハ也人

うるはり河鹿といふ　又河鹿ハ魚の類ゆて鳴りのよあ
ぐるよ唱へうり　らびといひ河鹿といふ魚ハ鮮うるハ〜く唱その
もいひてうれ可〜く實をちうざるの説ぐもなり
伊勢の久老神主の説ょ弓ぐ卿ょ河鹿とよびく
笑の末ょり秋うきて声高くいとうるハ〜く唱と
のあり魚の唱なるよ〜人のいへだされめりと思
ひありつるよ或附京師人と宮川の辺ょ魚つり
あそべるよ彼唱声をきていとうるハ〜紀蝦あり
といふり故あのれ向ひうくハ今唱れるものハ河鹿
といへる魚あるよ〜きりいても色をもらぐ

ありとハいへるぢと向つるよ彼人のいへるれハ
谷川よもゆる河蝦ゆて都ちくハ鞍馬川よおほ
くもあり吾近隣の人〜糸川より取来て飼るよ
秋よいうりてハ叫とよく唱つるを江戸人のこりよ
ようくおそれうりといへりさてハ河鹿といふハ
魚よハあらで蝦あるよ〜を〜且田面ょ唱蛙
とハ別あるてとを志きりとうれうこハ実ハ河
蝦あるを俗ょ河鹿といひあ〜ひ〜りのゆて魚よ
鯢といふものあるより誤りく魚の唱あるよ〜を
もいひつへまるものなり吾友澤近嶺ぐ郡ょ乃

ぼりし時伊勢の鈴鹿川にて始て彼鳴声をきて
ていとうるはしくなれて立やもとひて其鳴るものと見
とゑんとうしよりとちひさく赤き蝦ありなれい
まゝ小河津とよぶ人ハ見あるべしと思ひえて
其時よまれたる歌をも送られたり時ハ夏のまゝよ
てありしとぞ又其ものを都にて大きなる器に細
かゝきて河鹿とりゝ薄紙をつきて有とゝれバ則
河蝦ありなれを俗ハ河鹿ともいふまやと思ひ
まゝしよりおもゝれうおのゝ此考をよゝて我
もゝくしを思ひよりゝとそれうゝ又

岡野磐根云ひよりゝ年常陸國麻生の殿の雑波
より河鹿おほくめされく器の中に飼置のゝ紙
見ゝうゝもちひさき蝦にてありゝとゝゝれう
見およりて思へだ今の俗ハ河蝦のことを河鹿
ともいふと志れまり実に此ものをゝる人ハたゞ
く魚なゝぬとハ志れどもゝる河鹿とゝるものゝ
思ひて元来河蝦あるゝことを志ゝずいまゞ見ざる
人ハ魚の雌のちゝくとゝのゝ思ひり上野國人鈴木
有人云同國群馬郡中山道倉ヶ野の驛と高崎
との間南の方に法師とゝゝ処ありこゝふこまゝ

とりけものありこゑよるの鳴音に似たりといへり是
うたがひもなく河蝦（カハヅ）なりこゝには河鹿といひて高（コ）
麗（ヘ）蝦（カジカ）といへるまでさるべし上田秋成が俗に山かはづと
鳴く音ハさゝやかなる鈴（スズ）をふりまするごとくされども
すゞろくある故といへるも同じものなり山川に
て鳴を山に来る人のきゝて山かはづともいふなるべし
堀川後百首「時しもあれやこれ関山を転ゆれこ
のもろのもみぢかは鳴なりとよめるも此類なり下野
國足利郡小俣の大川勝長云我が母つまよりかり
けるはこの山川に秋よりて冬とかるはしく鳴も

のなるを河鹿（カジカ）といふ魚の鳴よしいへりまことに大
なるの池にハいと寒き頃も群ありけるに虫の子など
の鳴やうに鳴ものあり是をバ人のかはづといへり
あれしものにやおぼつかなしといふされどといへり
ちかきころ釋立綱が萍の譜にこのものを論して
云大かたの人此河蝦と河鹿なりとおもへり
河鹿といふハ魚の類にて鳴ものにあらじ伊豫の
松山の藩士（ツカヘヒト）竹村某ハ年頃川蝦（カハヅ）をそのあたりにつを
見のいとまにハ山川に猟してよく志るすなる人乃
河鹿といふハ魚の類にて其形のほどハあらねど化

して蝦(カハヅ)となれどくはしき辨をあらはせり
とかくしれきこれにて日頃のまどひハとけたり我
湖西朽木家の話にも河蝦のうまるる子ハ魚の形(カタチ)し
とあれバ始ハ魚のかたちにて後蝦に化すること
明らかなり云云此説始にハ河鹿ハ魚の類にて鳴を
のみあしびといひて又化して蝦(カハヅ)となるよしいへる
ハまぎらはしかくてハあつる形ハ同じものにて若
きと老たるとのけぢめのミ同書云武蔵国玉川の
かじかも大薩邑にもよしありてまうれるなどあれど
の翁寶筌齊のかかれるに此川にも河康ハすめる

をつひに鳴声をききてまゐるにてもなし河上などにて
ハ鳴にやとおぼえれけりといへりこれハ俳諧者流なれど
の河康(カジカ)鳴といひあへるハ魚の鳴よしいひつたへ
し誤なりつひに鳴辨をきかぬこそまことなれ
き魚の出でたるはしく鳴ことなくあくまで魚ハ人に
捕れて時ばかり出さうる声の出るがごときこと有もの
なり

それもたしかに鳴といふにハあらず腹中の息喉口より発れる音にて入声にキツ ヒツあるハキウ クウなどきこえて正音
あらびこハ生物ならざる器のたぐひにもひびく音ハあるものなるを
魚の鳴よしをいへるもむかしよりも拙世のことにもあらびる類の誤ハ
和漢ともにあまたあるあらず和漢三才圖會五十に云本草綱目ニ黄顙ハ
無鱗魚也身尾似テ小鯰ニ腹下黄云云群游作聲ヲ如軋々ト云云又今加
賀淺野川ニ多有之といひ其外處々谷川ニ有之といひ其声吾里吾里と云ふ
がごとしなどあれどもきかし水中のものハ風氣をえざるが故に鳴ことと

あるいはよくそのこころをもつて考ふるべきことなり水中にすむ河蝦といへども鳴ことあるいはべうれ水を出るく後こゑ声ハ出ざれ水獸の類の勢あるものにても水を出ざれば声を発しかるにそハいかゝふといふに筋の乃音声ハ風氣をえて高く響くなり志るゝ其理をさとるべしして猛き羽翼にて雌雄ともに奥の鳴よりいひつのる人あり水中にて声の出ざることハあの巻年月よ考てたゞしくこゝろうこゝろうんハ自ら知べし水中よりうんとハたゞもうこゝろぬハ風呂の湯よりくまを手拍を鳴こゝろうゝ音あゝ又笛を水中よ

入て吹見よ声出ること有べくこゝろぬ知と自銅壺乃水中よ鈴をのく鳴こゝろうゝ声水よりこもりていさこゝろへ声ハゴツくと云まてふて知べきあゝそハ器物にて水中よ倒生物とハこゝろうといへども池の中よ多く鯉鮒のこゝろびの奥どもを飼亜く餌をあくへこゝろうゝ水中にて竪横ハ散乱して餌をかくゆあくそくども音有こゝろあゝ水隙ハ出ていさこゝろうにても頭尾の水を出る時ハ大よ音あり乾風氣をこゝろうゝ友なり物の声ハ風氣をえて発ることハこゝろうし水中あゝでも箱瓶の類よ鳥虫の類を入てかく

く蓋をあゝして風氣の通さる時ハ声あくゝく
終よ死よいるべしゝゝとかゝれ亀かども
陸(クカ)ゝてハ鳴おとあり新撰六帖亀為家卿「河大
しのをちの田中の夕やゝよ何をときゝ分て亀そ
鳴ある吾友富安(トミヤス)幸磨云亀の鳴ゝ云ハ実よ詳
を発して鳴よあゝび氣(キ)を吹ふてボウ〳〵リと息(イキ)
吹出ゝ音(コエ)ありといへりつゝ亀でよ鳴ゝん中昔
乃蛙の歌よ水の下ゝて鳴ゝ云又水の底(ソコ)ゝて鳴
れとよゝるあり実よゝふゝハ水の底ゝて鳴よ
やと思ハれて形のゝえんざるゝものかり田の面よ鳴

蛙ゝ水より口を出ゝて鳴ゝものかるをあほゝうの
ふ事ゝてよまれたるふて河蝦(カハヅ)ハ水中のゝ高き岩
石をゝふ高くちひさきゝものくゝゝれ居て鳴なよ
うるゝと稀(マレ)かりこのゝふおのれあかりゝゝ先
てやゝやくよゝゝかり吾友薗田道別(ワキ)云河鹿(カジカ)ハ上
野新田領の山川よるあゝく石の間よゝもゝ
のゝかり秋の始ゝろ淺瀬よ出ゝて夜ゝる
ゝのかりゝでよおのかりゝも行ゝるゝてありきゝ
かゝゝゝたり又遠藤三蔭云おのれさゝよ長
野義波留ゝゝ信濃國よあそびたりゝ時

河鹿といふ奥を食ふ　山川の名同ふもそして大
さは戸の沙魚よ似て長さ三四寸ばかりもあり
ゆむといへり又神谷忠居云河鹿ハ義作勝山おど
ふもあり色赤黒き小奥く國人ハかぐきとも
いへりとかくさきりかれこそ考るふ河鹿
の河蝦ふ化するとハ有べくば鯉ハ蝦の子にあ
らず全く別種の奥ゆゑ河蝦ハ河ゆゑより奥
ふあくび水中の虫あり小田の蛙も始ハ口足のも
のにあくび魚のやうあてやがて足ハ出るものく
頭大きく尾ゆそゆれだ今の俗よおゑ杉ゑとい

へり始奥の形ゆるをあて本草ふ坐魚蛤奥の名
あるふや註ふ其性好坐也といひ又関中已常食
之如奥と有を思つで奥肉よむゆ多たる名ゆや
同書ふ蝌斗又玄奥とあるハうちよよれる名
ゆり又懸針とも以へり爾雅翼云其形如奥其
尾如針又弁頭尾觀之有似斗形故有諸名玄
魚言其色懸針状其尾也是則俗よりよおゑ杉
子あり本草ふ藏器云蝦蟇兒生水中有尾如
鯀奥漸大則脚生尾脱とくくゆり彼杉木家
の話も見ゆり今按よ鯉ハいあくへふきくくゆ

なほ石伏といへる魚のことなるべし和名抄云
崔禹錫食経云鮔音夷和名伊師布之性伏沈在石間者
也本草綱目補物品云石伏似魰及及而有鬚
大頭細尾無鱗腹白背有斑文而黒大者三四
寸性伏于沙石其味最美云云
おのれ玉川に幾度も行て例の信継をともなひて河原にありたちてみるに此魚石の下をうかちてあせりありけり石をとるものけはひすれば沙に甘てうごかざるものゝやゝありて鯯に走く又石の間に入ものゝ限りさるを此魚とよぶ時にむれをなして鳴よしなどいへる人有ハいかにもむらてを取り羽有虫にこそさるにてもあれ沙石の間に伏沈るものゝいかでか飛ん魚にも飛魚あれどこの類のものにあらじいふべくも石伏といへるをも思ふべし物類称呼五に少くきんぶとやまてどといへる所に仙臺にてハかいるれかじかと云ふ云此魚を撫史なる骨董集に鮔ハ石間にかくれ住ものなれバならんといへるハよろし　源氏物語常夏の巻に近き河よりまゐれる鮎ちかき川のい

しかやうのものおまへにてあぶりてまゐらせとあれどもやむごとなききはのものゝおもはしからぬものゝるべし此ものは石の間に伏ぐらへも石伏といふべきものにて鮔といふ名ハ此魚無鱗にして皮黒く斑文ありて皮の縮みたるやうにみゆるゆゑなれば皮皺の義にて皮縮といふなるべし　さて河蝦と鮔のまぎらはしきハ共に山川の石間に伏すものにて其辞をきく人なんぞ求めんぞ蝦は石の上よりのぞきて跡の石間に伏たる鮔を捕へてかなしむるよと暗推にかじか鳴といひてしらひ出ださむそれよりつひに

河蝦をも河鹿ともいふことハあやまれるなるべし されど虫と魚との別種なることハ論をまたず（魚ハ声をきゝてめづべきものにあらず虫ハ声をめづべきものにて虫えらびといふことさへあるをや）和名抄に鱅 知々加布里 と有もこの魚の類也 俳諧の七部集といふものに鱅をかじかに用ひあやまりまゝ日本釋名にハ杜父魚とかき巻懐食鏡。用薬須知等にハ杜父魚とも俗にハ鱅をよみあやまりかく文字ハ書によりてたがへることあれど実に其ものを正して後に文字のうへハいふべし 伊勢人奥村貞卿云同國壹志郡大和さかひの山川に砂堀といひて鳴魚あり其声ホイ〳〵といへるごとく呼ゆるをもて里言にホイ〳〵ともいひ又は河岸の砂をほりて伏居るに右の名ありといへり是和名抄の知々加布里によくあたれり ちかハ土にて土被の義とあるこゝに鰍といへど実魚の鳴やうにいへるも上の説とおなじく実ハ蝦なることをさとるべし 三才圖會にいふ吾里の類もしかいへり豊後國などまでハ江戸の沙魚の類の魚を吾里といへり又常陸國にてハ吾呂といへり今武蔵國玉川辺にてギバチといふ魚もまた鰍に似たり按に補物品の及及

見ゆる須知。食鏡ホよ黄顙魚といへるものも見
あるべし〳〵多識篇ホ黄顙魚和名多良とありく
鱈ヨ當たり見よよれそ別種ありされど食鏡ヨ
黄顙魚以此物訓多良甚誤也云云論じて岐々
俳諧者流のいとゆるギギウゆて鯷ホ似るる
もの例り和名抄ヨ鯛魚加良加古といへるもの似鯷魚而頰三
著鉤者也とあり〳〵これもその種類のものあり三
才図會ニハ黄顙魚と鯷と混ず今按ヨ頰ヨ鈎を著といへど及
々ゆてらのギハチあるべし〳〵常陸の京元可浦の辺ニてハギンギヨバチ
といへり又武青梅辺にても赤うりと見則及く蜂ゆてギバハられら
声あり人捕られバギ〳〵と鳴を発て付者取ときに人を螫といへり
故ヨギ〳〵蜂と云ある
へし則黄桑魚あり おのれ付考あり〳〵免書つれど
猶こゝろあちねざりられバやがて江戸の西武蔵国

多摩郡玉川の辺國分邑の小林信徳太郎兵衛を尋ね
て共ヨ玉川ヨあきりく鯷も河蝦も及ともこゝる
其ろ〳〵きこゝハ玉川の日記ホ志るされハ此さて
玉川ホ付りのぐもを取えるハ文政七と世やそいの年
の八月晦日の夕のこゝ鯷の河蝦ヨ化もるものの例り
バ付時河鹿ハあゝじを眼のあゝり取えてこゝり
えそ魚あれど蝦の類ホあゝび信徳ハ川漢をこの
こそつるヨ付川ヨ魚を取ホ鯷ハ春より冬ゝをて
ゆと寒きゆも取りのゆり河蝦ハ中〳〵ヨ春もおそ
く出く秋ゆきてハをゝざるものゆて夏より初秋

の頃までハあきぐも中秋ハいろうてハ鳴ぬものなり
といへりすでハ今八月晦日あれども声きゝだやゝ
水除(ミキハ)より日をゝくしぬれと一声ばかりもきゝハされと
寒暖ハ國まも異なるものなるべしひゝくしハ
ゝゝりゝてハ初秋をうぎりて中秋まハ声をきゝハ
といへだいとゝ思ハ鳴く思ひありぬれと志ハゝよ
こゝろさしふかくゝりゝゝ先ゝる河まハ神さ
ちもあれゝ殺ゝゝ河(カハツ)蝦ハ三ヶまでえゝゝり春の
小田まゝるものよりハちひさく黒く痩(ヤセ)ゝゝとよゝ
いへるよゝゝゝび又一種ハ志ゝゝふゝゝハ黒よ

青黄(アヲキ)をふく先ゝる脊(セ)より痱瘤(イボ)ゝゝものありて法
ねよ胞蛙(イボカヘル)とゝふものとあれ〻ゝやゝありむおのれハ
声をきゝねだいのきよゝゝむまゝゝふハいひゝゝ事
まで信繼ハつゝふ山河より殺ゝてきゝあれゝる人
まてよくゝ志れるゝかゝりゝゝハ武日水除より昇
て殺ゝたるゝゝゝの石間より声きゝゝに鳴ゝゝの
あり人の河鹿とゝふハこれまて奥の鳴ゝやゝお
ゝひくよくゝれハゝとちひさき蝦(カハツ)の石のよゝゝり
て鳴ゝれださてハ日こゝろの不審(フシン)なれゝり魚の
鳴てふあゝゝと思ひゝまたゝび河蝦(カハカヘル)ゝゝ

あれと心をとめて見されたる小田の蛙ハ鳴時に
口の左右のわきに歌袋といひてまどかなるふくろ
を山川のかハづハ鳴時に顋の下に大きく歌袋
ハなくかハづふくるゝものかたりといへりかくこまやか
に見とめて雅友の主をも玉川よりいさなひく其
蝦ども取えられど時おくれて鳴ぬこそ残る事
れなるまたこん秋をまちて声をきゝてんと江戸
にもて来りて庭に住処つくりてかハづを餌にか
ひ置しに後にハなれて人おそれず出て餌を求めり
雅友のよくこれぞ手の脂四ツあり雞冠樹を蝦手

といへるを思へば脂五ツ あるべきをさハ
別種あるにや雅田の面の蛙をも取えて見まほ
しそハとまれ奥の鰍と河蝦の別種あること
うたがふべからずもていへるごとく人のいへる是
音をきゝて河蝦ハ遠く逃て水ふかくかくれる故
にめしらる鰍ハとくに渋て動ざるものなれハそれ
をあさり出てこれが鳴るよしをおしあてにいひ
おもへるをとりひろめしそのことを世にひろくなり
てかゝる秋鳴ものハ河鹿といふものゝまぎれ来
まてかハづといふ名ハきえてなくなりゐるよ

又春の小田に鳴るものゝ其名のことして蛙とも
名ハ俗語(サトビコト)とゝなれるごゝ蛙(カハヅ)ハかとゝの名にて
俗語にハあゝびゝとゝれども万葉の中に
きハ小田に鳴くなるハ鞍ごゝとゝゝゝゝびめぞ
歌にもむまでもなきわゝれとゝ有ゝ志ゝ海にそれ
をゝゝびとゝにゝゝる歌のおほきハ万葉の中歌
にもとゝにゝゝるものゝ外に春のをもめつる
ゝゝひとゝなれるものゝ外にゝて又の後河蝦(カハエビ)をゝ
も河鹿(カジカ)とゝひてめづるハ魚の鰍(カジカ)のゝ如くのゝ思
ひ居ゝる人のたまくゝまゝとの蝦(カハヅ)の鳴をゝて河鹿(カハシカ)

とゝゝゝハ魚にハあゝてちひさき蝦(カハヅ)ありとゝハゝゝく
ゝゝれども世の人のいゝの処にハゝゝゝひてそれを河
鹿(カジカ)とゝゝものゝそんぬきゝるゝゝてその河鹿(カハシカ)の実ハ河
蝦(カハエビ)ゝるゝとをゝゝざるものゝ外に常陸國奈佐加浦に
あそび〳〵時井関の盛賢寺に宿をとゝ
と流(トキ)る時あるゝゝの幸塔法印と法(ホウ)のゝゝゝゝ
ゝれで府中宮新の不動院長祐法印もおゝ
む〳〵ろにおゝ〳〵ゝるゝゝゝゝゝゝ水戸天下(テンカ)堅邑金澤
山圓鏡院におゝ〳〵ゝる時ゝゝ月のゝゝごゝろ武(タケ)
生(フ)山のゝもとの山川のゝとゝをとゝゝゝゝ鳥の囀(サヘツ)る

うと思ひのづからあいれよるハ〳〵き鶯よく囀
るれば立ちぐまりくあるうち成るものも
あ〳〵絲だこハうゑてきつる河廉のかるゝある
べ〳〵見でハやまず〳〵やく侍者あどハ遠く去り
そきてものよりうきて音もせで待居たれ
た水際の石間よりとのこゝく囀るを見そうよ
うれバいとちひさき蝦ありたれださてハ世の人
の河廉とよぶハこれあやまりと思ひてうるをりこ
き歌をもよまず〳〵たれと思ひたるとハ何ぞあ
ゝ〳〵歌をもよまて出されるを始まて風流

よ心ハよせ〳〵きこうり吾友片岡寛光云ちゝき
こゝろ京うゝふてハ河鹿籠とて銅の網をたり
たるさゝやうある籠あゝくそれよ彼河廉を入
て忘さくゝもの則ち河蝦まて奥まハあゝび奥
ふ雛のあるようまきれ〳〵ものあるべ〳〵といへり
さるをしゝひく奥の囀るよ〳〵いひつゝんとて何
ゝれと説をきつるハ彼榎の実ハあゝびあれ木ハ
椋のあやまへうんさくひあり雛ハ沙魚のゝく味
ひもたほくゝゝ奥ちゝり おのれ式考をる沼の年ふ
仮給川越をへ〳〵中山道より上毛ふゝゝと下毛日光山よまゝぐ
ゝ〳〵ゝ山川のゝゝげをもきゝだやとゝゝ山よりゝゝ大座川を

そこなくきまるくるくる波のあゝきよまぎてうやうゞの声き
こえゞ程下毛奴の川くゝる耳ゝめつねゞとりのあゝきこうや和ろ
もきろざりきちろろ日光をこちて今市ゝ宿りろるときかゞりを
食しろうちゝあゞくるゞくゝみてハせうりハゝゝら程く色赤く高し
亟ゞハあまろゝふくろう口大きく小石をのこてたらの中ゝあるをこう
てくらふ魚ゝ形り鹿沼宮神宮四てもろゞゝハあほくゑさくり
その時えくるものハ以とちひさゝりゝを焼く食
ゝり河蝦ハ手足ありうく小田ゝ住蛙ゝ大ゝくお
ゝゞいさくゝのくちゑハ上ゝいくりゐんくゝこうゝ
ゞゝらゞたゞ河蝦の拜の清亮なるをもて山の
鹿ゝむくて河鹿といふ　いちんハ一ゝろうハ字えられ
ど奥の津波ゝそハ川ゞゝ云ゝゝ国人いゝり　以名いゝゝへゝきこえゞ後の
俗称なり河蝦の聲のよろゝきこゝハ上ゝもいへ

ゝきゞ万葉六不所念来座君乎佐保川乃河
蝦不令聞還都流香聞　同七佐保河之清河原
雨鳴千鳥河津跡二忘金都毛右のごく客人
ふきゝせざるをくゝゝ又ちゝゝとゝゝ忘ゝ
ゝるゝゝいへるをもて拜のゝのつゝゝゝぬこと
をゝるゞゝゝれゞ鯉と河蝦と混んこハ蛇
見て龍を画んゝりハ遠くちんある吾友鈴木
順政云古今手角ふ云万葉ふ和ゝ云ゝ来ま
せる君をさほ川のゝゝゝきゝせゞゝくゝゝつるも
とよゝへるをもて聲おゝゝ流きをゝゝる今の

俗はこのごろといふも古のこゝらびあるへしさてそれは春よりいまゝ明はして夏のあらたより秋をのねく明はりゝ云云こゝえらるとは考よくあくゝ宗長が九九記は庭の山水雨よりほされて石ゝこゝらやゝの詳きこゝまきて「せきいゝ」庭の山ゝこゝろくくと石ゝこゝゝ雨もらむなりアヲ又あるりのに「こゝろくくと小石あゝゝ谷川よかゝ明はる水の流合石伏こゝゝとまよいゝるはあはつゝはゝとゝいゝれゝゝいゝゝも始の歌よいゝゝこゝゝゝこゝゝゝへるはまゝゝゝゝゝきいひざゝ

あり宗長は玄頂の連歌を宗とせられたる人ムネ
みていゝくを云はるる時あれた論よなべゝゝも
思ふは今の世は河蝦をこゝゝといひそきを
かゝゝゝくるとゝの影をそいゝゝこゝゝゝいゝる
あるべゝ河原の名ゝゝくはきこゝんねゝ奥ゝはハ
名伏出ゝてハ河蝦とゝてゝのゝこゝゝゝびてゝはるまゝて
いゝんや鮠カハカと河蝦カハハの別種はる鮠ぜゝんゝ有べ
ゝゝび
おのゝ音を奥よゝゝれて明ゝゝの幾秋ゝゝゝいまゝゝれよ
玉川の流のまよゝめゝれて水上ゝほくゝゝのちくゝゝ

真楫

いすゝくハ布さらしたる玉川の井出これ源よりかハなく

たひらぎの考

此考書する又の年の二月より玉川にいたりて
かれこれにたづねくあまねくめぐりを
とめてきゝまなしつれど猶あやしくおぼえて幾
度も玉川にゆきて下川瀬六合のわたりより
二子のわたりをさかのぼりにむさし嶺ちかく羽
邑の堰堤 此ゐせきハ玉川の急流をせきあげて大江戸のやち まちに分水を此處にて玉川南北にわかれて二流 となり南ハ六合のわたりに出北ハ江戸の四ッ谷に入て町々をかぎり もれく水道をわたりうる清きながれをせきあぐる水のさて をきひえもいさひきよりにいさよの流の音さやかなることの水上 に水の神のやしろあり 河原の石ハ玉をしきたらんやうなり

今ハてつくりさらしハ葉も名のみのこりて猶出これなきのいと きゞすられるをとこるもまことむさしの井手の玉川といひつべし 猶
るゝく青梅の里にいたり根岸典則老人を尋ねて
溪雲軒に宿りて猶水上なるきハみんものとぞおもひゆり
翌日小林綾繁が戯咲歌林を訪ふにゆきよりける
いしき友ありけれバいとよろこびてむかひとりまで
うかられ日横川長秋が領廼屋に宿れバ此里ハ風
流の地にてんゝ日ゝ訪らひ来て古ことしのび歌
ねらふをおとればそのついでに河蝦のことをとふらひ出られ
ぞ綾繁云これハ玉川にても上ッ瀬にて水ともきよ
く河蝦の聲もことによろしきなるべしいさそのうハ

げきくうてう歌をもよみてむとて後鑒長秋を
たづねて河鴻清住岡部古道岡崎山蔭等あるこの
人々と共に卯月の始つかた河原よりあり立てかれるこ
なるを見めぐるに河もるどく切岸(キリキシ)のいと不ども波浪
の打ちるさまいかばかりかは三吉野(ミヨシノ)の岩(イハ)の空さら
もあどよくりむるうもをさくおとるべくも
あらぬと清らかなる河原の石どもひあらして
まくるの莚(ムシロ)を敷きて檜(ヒ)ごやくのものあまく
ちくらして日くるまでうたぎしてうさうあい何
よりむあぐくはひあくるわどくに河の洲(ス)の石あるふ

くるよりのうふあつられれる茅のヒウミときこゆ小
鳥かどの雛(ヒナ)かややを思ふかりあり人々あれい何
の音(ネ)ぞやと打うなるふさるものもうえぶ牡丹とうく
もなくハ河蝦(カハヅ)かぬりと耳そばたてきくぞいと
ありがたくるハきれうう浪の音よりかくれてあの
うあれどぞ小田よつもきくつる蛙のあるべくもあ〜ぶ芦
の末より秋よいくうちあぐいかばかりるハうん
と思ひやるる去年の秋よりおもひ立てこころを
ちくこの春も二月ハかりよりあり立て下
の瀬より河よつきて二十里よちくき間を若鮎(アユ)

あらそひてさろのぼりまきるうひありて紙をもま
くそその群をきくぬるこそうれしくれ人くその
ろうり得てゝごれとそて皆つるたぎにありこちて
警あさりよあさりうれど見えびゝぐ水の底より
て鳴やうよきこゑ後よらくくこと絶つれぞこうれ
水中より出る墨き石の上いたその間あどのうに
うなる処より同じ墨色あるちひさき蝦のとをつき
居てあるだあとハえんざるものちうハ水より入てくゝれ
ハな翌日春花亭清住より河蝦あらびより小田め蛙
も取えうとそおくうるところ上るいくるところ
よたぐふこれしそその翌日

守屋寛命老人まるべゝて金剛寺の前の流より出
て蟾蜍をもとめつれとうえびこゝハつるよあほく住
処ありとそゆきこうるあるうりうり山をうつりそれハ青梅山
市堂の前より梅の古木あり相馬ノ将門の手植の梅ありくくりこの梅
の実いつも青く色つくとゝ形ゝそ里の名を青梅とりふもこの梅より
出て名
つゝゝゝうりぐそうまくさ流よそひてきびぬるよ云
きハこえびゝの青蝦蟇大きく脊より青
きこなき蛙なり群ハいとよろゝ山川もも小こぞうもまり
中昔ようこうくと鳴とよ色るハこの川よすむそのちり
あと多く居られだこうそて三三日ゆるてあれゝ人
より蟾蜍をえくうとそおくうるよの脂ハ用ありあれ
ども大脂とおぼゝき処より若雞の距の出うまるる

てきものあり色を合もれば立ッ脂のうちにあり
足ハ六脂(ムツユビ)あり蹼(ミツカキ)あり くつつ形にあり此ふうの
里言ハ人の足の六脂(ムツユビ)あるを蟾蜍(カヘル)足(アシ)といへるハ是
なりと老人いへり 蟾蜍(ヒキカヘル)ハ蝦蟇(カヘル)の首長くるものをいへり
ときあり今も此相の地にて大社よりまいつる人あれハこれらハべともの
つぶひあてビキトされとこのびきハ蟾蜍のようなるものあり
そのものとふくるといふことをしいふの義なり
そのうへくるとのこりのこと多くれば催馬
楽のカあきくるといふもいとくちくちあきさるのものなり 蝦蟇(カヘル)ハ
あしをりてもこよひゆくとくちくちあきさるのものなり
種々(クサ〳〵)ありて上はいへり赤きも黒きもまぜて脂(ユビ)ハ
ほりまて足(アシ)いれ五脂(イツユビ)ハ脂(ユビ)ゆていづれも足の脂(ユビ)ハ蹼(ミツカキ)
ありて水中よりくゝきをるをとれた実

ハ雞冠木(カケイ)の葉ハ似たるものの形り万葉ハ是歟
うくるもの中ハいへるもの足をとるさざるもの
ちはうくるこうりあるここハ赤ものいへるハ
あらあんとつくく考るハ足(アシ)を正(タダ)しくとる
ハ人躰の字ハ鳥獸(トリケダモノ)虫のくくひハ鳥ハ足
ハ侯ハまりせていへるハ中ハ獸ハ足といひ
て足をむかうし虫ハ百足(ムカデ)ハ大くくといひく
ふをむかうせり 百足(ムカデ)ハ八十足(ヤソデ)あるも足のおほきをくしひ
てあしといふをあらんたうへくしひ蝶の足をもくもでといひ
ぶり例るハあるす水ハうるもくもでのくびひそ
うりこもいすくくハ人の足あるも俗ハ足をとりくう
いくることハ信なきくく

○河蝦考

卯月の歌 青梅の人くくとれハ沛

嶽より[illegible]んとて玉川をさらのぼるに蝦ハ水上
ほど群よろ〳〵実に驚に對へいそんもてとらうと
ぞ思ふ〳〵玉川の水上ハ二所あり一方ハ甲斐の入
口なる多婆山あり一方ハ秩父よりくだりて日原の
ありいづれも大瀧有といへどもさろ〳〵て其処に
てハあり〳〵（家に玉川のとくハまほ〳〵きことあれど玉川の日記にまるに）青梅より五
里の河上氷川邑にて落合て玉川いよく水まさ
れり又青梅より西北のかたに小曽木成木乃
ふるうにあるぞ水田あくて田蛙の群まゞるとと
あく谷川の河蝦のこゑにてとに群めてたくあハ

ゞ〳〵山時成木の清水泰隆と云に正沢にい
ふり木滸典清ら巖廻屋に宿りて古を説ふに
軒ちく谷川流て庭のやう水のこちに水の音に
森〻くハゆるりあく雨のふるゆゑにこうふる夕ゝに
まゝて河蝦の鳴群を遠くきゝて茅蜩うとうと
られちくてきゝバ夜のふけるをりあぐハヒウ
ミリと群をそりあぐるハ鹿の妻こふるにも似
るひとり

日ゝにの群ゆきゝて谷川の夕ゝまゝてハ
河鳴ふり仮農の亀文老人云秩父よりくだる

てゝよ声ゝるハし実よ庵の声の不たきよ似ゝるあ
まとゝいゝり粉尋ゆりむとで思ふ世よ案上(ツノエウス)の学文
とゝふてあるを今思ひ志ゝれゝう山ゝうハ江
戸よりゆとちゝきとこゝ行おきで今までかるゝめ
ありゝも志ゝでゝで蛙とゝハ春の田よ鳴ものゝ
思ひ居ゝうゝる賤(イヤ)しき身よすゝ志ゝう去年
の夏より歌枕(ウタノマクラ)ゝと思ひゝちてゝゝを旅行る
よ深山幽谷の嶮岨(サカシキ)をゝるハ心安きものよあゝしま
しゝてゆゝんや弾会以来の雲の上人おのゝてれゆゝ
免しき殿舎(ミタチ)よ奥ふゝく生(オヒ)ゝゝせ行ひゝくゆゝさゝの

旅路をもたゝゝせ行ねて山谷の川ゝよゝゝる
ものゝ志ゝて呼むてゝゝをゆゝてゝ見等行ゝむゆゝよ
しゝハ公卿とゝゝゝゝも国ゝを経ぬひまゝて受領(ズリヤウ)
ゝよりなりのぼゝ行くるきゝゝさゝゝき山川
をも絶めゝるものれゝれば万葉の頃よゝゝる河(カハ)
蝦(ヅ)ハ実(ミノト)ゝりそれより後ハ書(フミ)のゝゝ古歌のゝゝよ
ゝとつきてゝものも定行ひゝれで山川の河蝦ハ志る
人ゝゝ田(タ)の面(モ)よ鳴ものよ名のゝゝたるハてゝゝ
なりゝて今の世とゝゝありてハゝもよゝゝゝゝゝゝ
れまゝよのつゝよれゝゝひて題の蛙ハ春のものゝ

て苗代小田よ習をのをいひ山河まの〻昭河蝦(カハヅ)
をハ万葉よりく秋の題とさくもへしそも何
某の石を寶くとそるゝぶひの徒(トモガラ)ハとまれかくまれ